

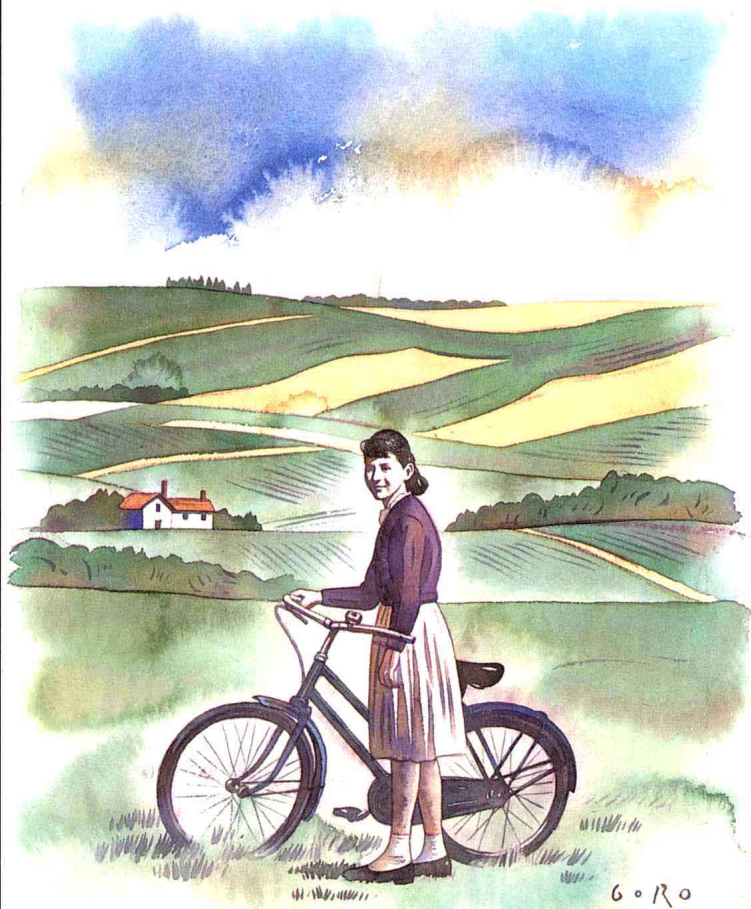
Régine Deforges La Bicyclette Bleue

青い自転車①

青い自転車

レジーヌ・デフォルジュ 青木真紀子訳

1939-1942



60R0

Régine Deforges La Bicyclette Bleue

青い自転車●

青い自転車

レジーヌ・デフォルジュ 青木真紀子訳

1939-1942

江苏工业学院图书馆
藏书章

集英社

青木 真紀子 (あおき まきこ)

1959 年生まれ。国際基督教大学卒業。東京大学大学院博士課程単位取得退学。翻訳家。訳書にジャン・エシュノーズ『われら三人』『マレーシアの冒険』(集英社)。

Série "LA BICYCLETTE BLEUE" 1

LA BICYCLETTE BLEUE

by Régine DEFORGES

© Librairie Arthème Fayard, 1993

This book published in Japan by arrangement
with la Librairie Arthème Fayard, Paris
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

あおいじてんしゃ
青い自転車 1

一九九七年十一月三〇日 第一刷発行

著者 レジーヌ・デフォルジュ

訳者 あおき まきこ
青木真紀子

装画 佐々木悟郎

装丁 スタジオ・ギブ

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

〒101 50 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

編集部 (〇三三) 三三三〇—六〇九四
販売部 (〇三三) 三三三〇—六三九三

電話
制作部 (〇三三) 三三三〇—六〇八〇

印刷所
製本所 図書印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©1997 Shueisha Printed in Japan

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

¥1600

© Makiko Aoki 1997 ISBN4-08-773273-8 C0097

一九三九年。

レア・デルマスは十七歳。

芳しい^{なご}ポルドーの光輝くブドウ園で、家族の愛に育まれていた。

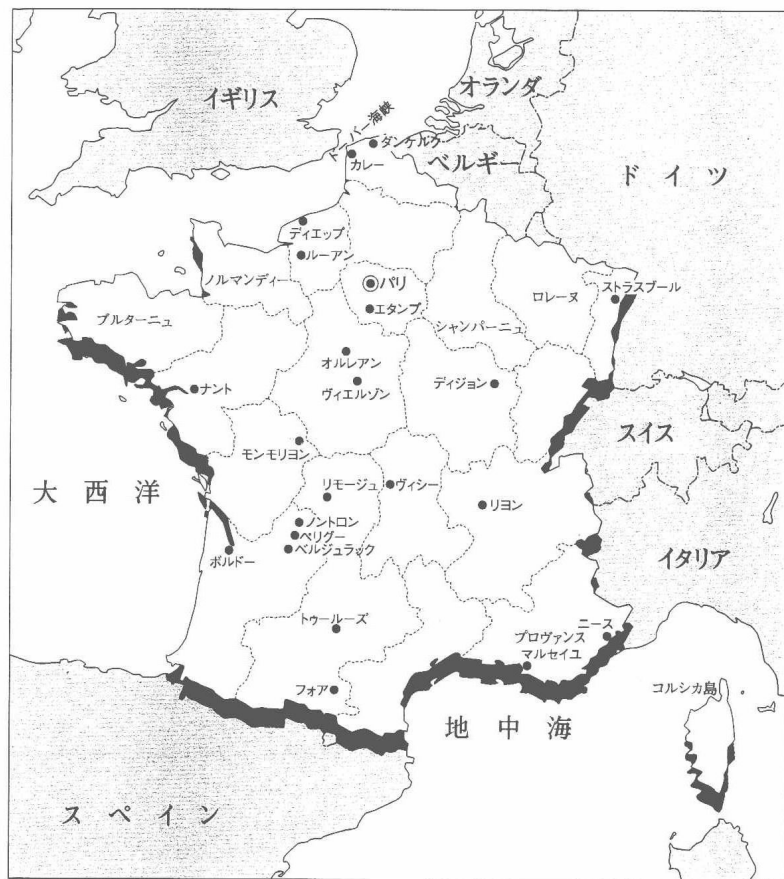
ところが戦争が勃発し、美しい夏は終わりを告げてしまう。

ひとときをパリで過ごしたレアは、

大量の難民とともに大混乱の中を命からがら故郷に帰る。

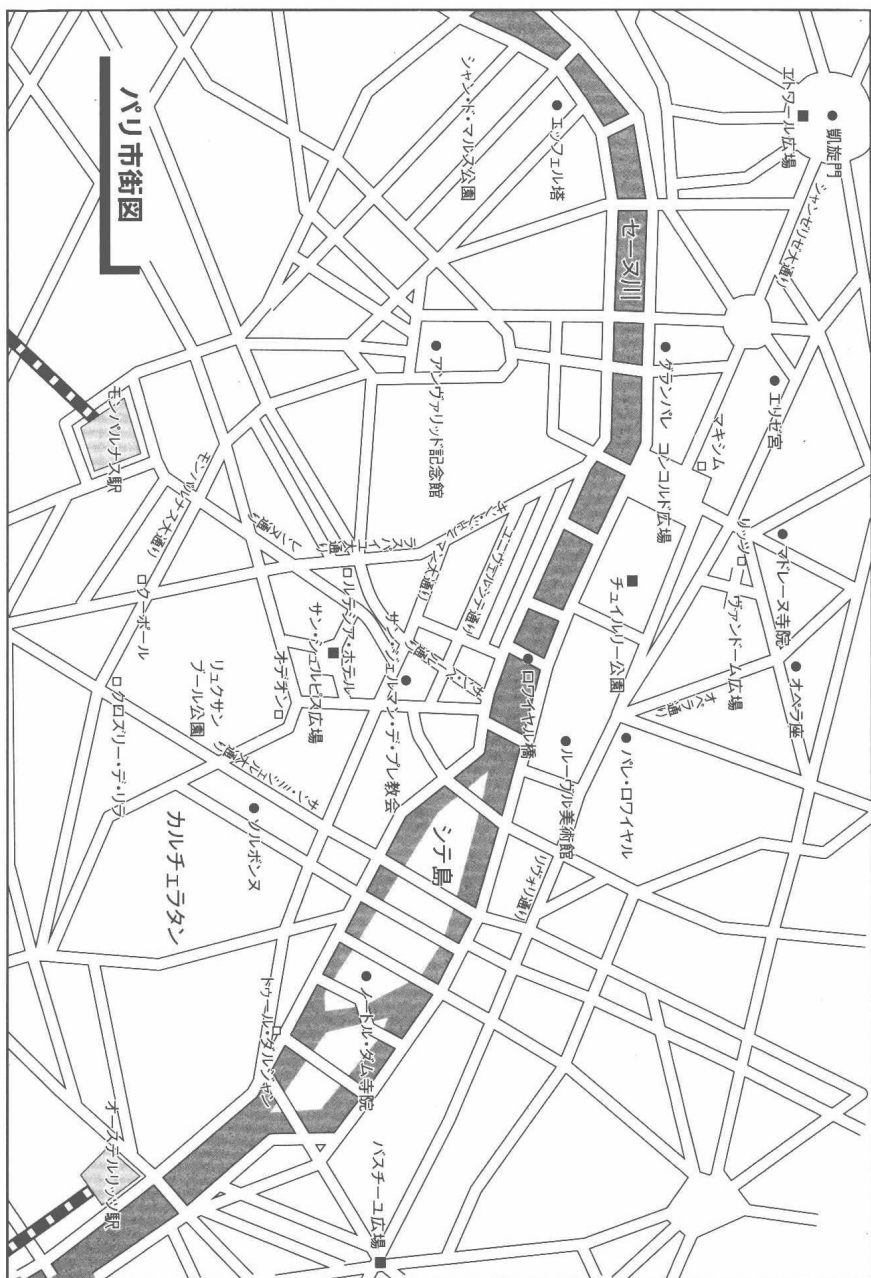
しかし故郷もまたナチスの手に落ちていた。

それが彼女にとっては想像さえしなかった苦勞の始まりとなった。

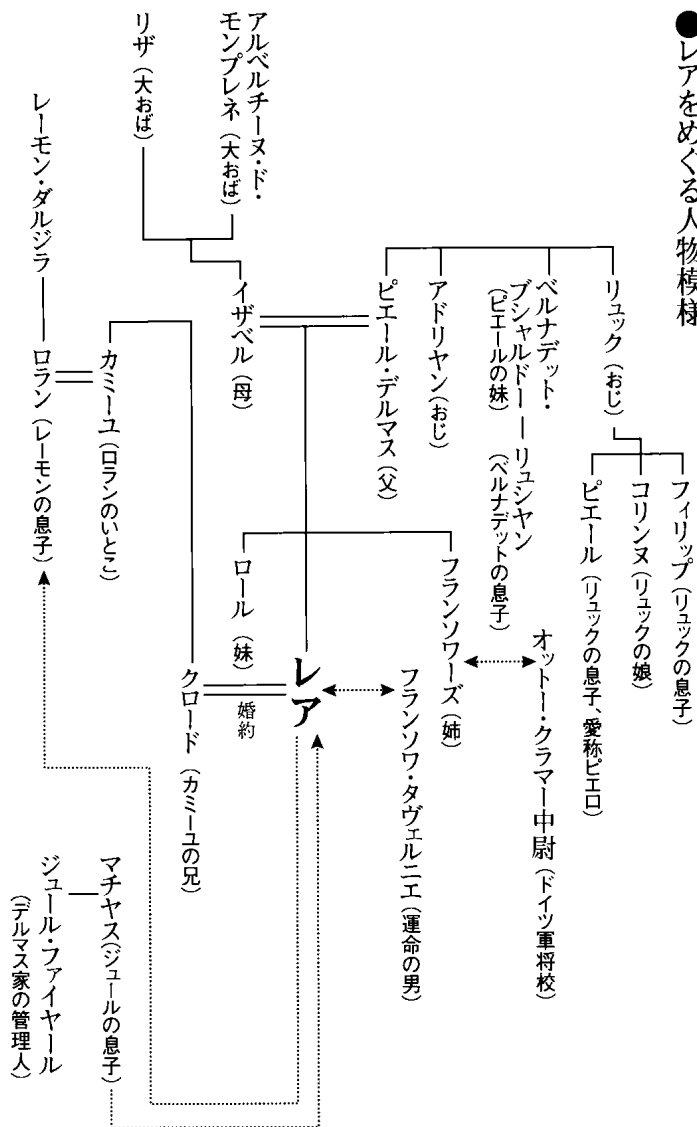


ボルドーとモンチャック周辺





●レアをめぐる人物模様



【主な登場人物】

レア

本書の主人公。ピエール&イザベル・デルマス夫妻の次女。母親譲りの野性的な美しさ、炎のような愛の情熱を秘めた少女。フランス・ボルドー、第二次大戦の始まりとともに嵐のような女の人生が始まる。

ピエール・デルマス

ボルドーのモンチャックの大地主。代々のブドウ園を継ぎ、拡大させ、高級ワインを醸造している。

イザベル

ピエールの妻。マルチニークの名家モンブレネ家出身。母親はクレオール的美女。十歳まで島で育った後パリに出る。

フランソワーズ

ピエールとイザベルの長女。

ロール

ピエールとイザベルの三女。

アルベル・チースド・モンブレネ

イザベルのおば。レアの大おば。

リザ

イザベルのおば。レアの大おば。

レーモン・ダルジラ

ピエールの友人。サン・テミリオン近くに住む裕福な地主。

ロラン

レーモンの息子。フランス軍中尉。

カミーユ

ロランのいとこで、妻となる。

シャルル

ロランとカミーユの長男。

クロード

カミーユの兄。ロランとカミーユに復讐するため、レアが婚約する。

リュック・デルマス

ピエールの兄。ボルドーの著名な弁護士、保守派。

ベルナデット・ブシャルドー

ピエールの妹。大佐未亡人。

アドリヤン・デルマス

ピエールの弟。ドミニコ会神父。有名な説教師として世界を回り、対独レジスタンスに加わる。

フランソワ・タヴェルニエ

フランスの内務大臣顧問。政府や軍の極秘の任務にあたる。レアの運命の男。

ジュール・ファイヤール

デルマス家のブドウ園のワイン醸造所長。イザベルの死後、土地の乗っ取りを企む。

マチャス

ジュールの息子。レアの三歳年上の幼友だち。

ジャン・ル・フェーブ

ヴェルドレのブドウ園主アメリの息子。レアの幼友だち。

ラウール

ジャンの弟。

ビエール

リュック・デルマスの息子。愛称ビエロ。

フィリップ

ビエロの兄。

コリンヌ

ビエロの姉。

ラファエル・マル

ゲイの作家。戦時下、謎の行動をとる。

ザラー・ムルシュタイン

ユダヤ人の世界的に有名な指揮者
イスラエル・ラザールの娘。

オットー・クラマー中尉

ボルドーに駐留するドイツ軍将校。
デルマス家に寄寓する。

フレデリク・ハンケ中尉

クラマーの同僚のドイツ軍将校。

リュド

イザベルに仕えてきた家庭教師。

シドニー

デルマス家の元料理番の老婆。

エステル

アルベルチヌスとリザが住むバリの
家の家政婦。

ジョゼット

バリのカミーユ宅のメイド。オルレア
ンで爆撃を受ける。

トリヨー夫人

戦火から逃れるレアとカミーユを
助ける、モンモリヨンの女性。

リュシヤン

ベルナデットの一人息子。

ブランシャール先生

デルマス家の主治医。

ドブレ夫妻

ラ・レオールのレジスタンス支援者。

ボワンソ警視

ボルドー警察の幹部。レジスタンス
の取り締まりにあたる。

ドーゼ

ボルドー駐留のナチス親衛隊隊長。

作者は次の方々のご協力に謝辞を捧げたい。ほとんどの場合、意図せずにご協力いただいたものであるが。アンリ・アムル、ロベール・アロン、マルセル・エメ、ロベール・ブラジャック、ブノワ・メシヤン、ルイ・フェルディナン・セリヌ、コレット、アルチュール・コント、ジャック・ドラリュ、ジャック・デルペリエ・ド・バイヤック、ジャン・ガルチエ・ボワシエール、ドゴール將軍、ジャン・ジロドゥー、ジャン・ゲノー、ジルベール・ギユミノ、アドルフ・ヒトラー、ベルナール・カルサンティ、ジャック・ロラン、ロジェ・ルメル、アラン・ルレ將軍、フランソワ・モリヤック、クロード・モリヤック、アンリ・ミシエル、マーガレット・ミツチエル、ピエール・ノール、ジル・ペロー、ペタン元帥、L. G. プラーヌならびにR. デュフォー、リュシヤン・ルバテ、P. R. リド、レミ大佐、モリス・ザックス、シャルル・ティヨン、ジャン・ルバダレンク、ジェラルド・ヴァルテール、ヴィアゼムスキー公夫人ならびにイヴァン・ヴィアゼムスキー公。

青い自転車

イヴァン・ヴァゼムスキー公の思い出に捧ぐ

プロローグ

ピエール・デルマスは一家の誰よりも早く起き出し、まずいコーヒーをすする。冷めないようにと家政婦が年代物のレンジにかけておいた代物である。それから飼犬を口笛で呼ぶと、冬ならばまだ暗いうち、夏ならば薄暗い朝まだき、外へ出ていく。何もかもがまどろんでいる時刻の、大地の香りが好きなのだ。見晴らし台の上で、彼方には海が潜んでいるランド地方の薄暗い地平線を眺めている頃、朝日が射してくる。ピエールに悔いがあるとしたら、船乗りにならなかったことだけだろうというのが、家族の口癖だった。子供の頃はボルドーのシャルトロン波止場で、貨物船の出入りするのを何時間でも眺めて過ごした。その中の一艘の船長になって大海原に乗り出し、嵐に立ち向かっていくところを想像する。神を除けば、ただ一人自分だけが舵を握っているのだ。ある日、アフリカ行き石炭運搬船の船倉に隠れているところを見つけられてしまった。脅してもすかしても、どうやって船に乗り込んだか、どうして

愛する母に一言もなく出発しようとしたのか、少年は頑として話そうとしなかった。この事件以来、冒険とタールとバナナが香り立つ貨物が積み上げられた河岸を、ピエールが歩き回ることとはなくなった。

ピエール・デルマスは父のあとを継いで、ブドウ園を経営することになった。海へのかなわぬ想いを断ち切れなかったからだろうか、西からの海風になぎ倒された松の並ぶ広大な土地を、毎年購入していった。三十五歳になると、そろそろ身をかためる潮時だと考えた。だが良縁は降るほどあつたにもかかわらず、ボルドーの社交界の中から相手を決めることは拒んだ。そんな折、パリに住む友人のワイン商宅で、イザベル・ド・モンブレネに出会ったのだった。ピエールは一目見るなり恋に落ちた。娘は十九になったばかりだった。重たげな黒髪の新ニヨン戴着頭を反らせぎみにした風情や、美しい青い瞳が憂いに満ちていたせいで、もっと年上に見えた。イザベルはピエールに対して

気を遣っていたし、感じも良かったのだが、ピエールの方は、時々この娘には上の空になったり、寂しそうな瞬間があることを見逃さなかった。彼女の寂しさを紛らせてやろうと思い、うっとうしがられない程度におもしろおかしくふるまった。イザベルの笑い声が弾けると、自分は世の中で一番幸せな男だと感じた。素晴らしい髪をそのまま生かしていることに好感を抱いたが、それというのもボルドー社交界の娘たちは流行にとられすぎていたからである！

イザベル・ド・モンブレネはマルチニーク島(西インド諸島の島)の裕福な地主の一人娘だった。十歳まで島で育ったので、土地の歌うような話し方と、どこか気だるい動作が残っていた。おっとりとした外見とはうらはらに、毅然として誇り高い性格の持ち主で、年を経るごとに性格の強さはますます確固としたものになっていった。イザベルの母親はクレオール(旧植民地生まれの白人)の美女だったが、亡くなった際、妻の死に痛手を負った父親は、妹のアルベルチヌとトリザのモンブレネ姉妹に娘を託した。妹たちは独身を貫き、パリで暮らしていた。半年後に今度は父親が亡くなり、イザベルには広大なプランテーションが残された。まもなくピエール・デルマスは、最初から半ばあきらめつつもイザベルに愛を告白し、結婚を申し込んだ。娘が承諾したのは嬉しい驚きだった。一カ月後、サン・トマ・ダカン教会で盛大な結婚式があげられた。二人はマルチニーク島にしばらく

滞在した後、年老いた家庭教師リュトを連れ帰って、モンチャックに居を構えた。イザベルがどうしてもリュトと離れたがらなかったのである。

それまでこの地方には縁のなかったイザベルだが、たちまち夫の家族や隣人たちと打ち解けた。結婚に際してかなりの額の特参金を受け取っていたので、それで新居を飾った。三十五歳まで独身だったピエールは、館の中のほんの二、三室しか使っておらず、他の部屋はほったらかしにしていたのである。一年もしないうちにすべてが変わり、長女フランソワーズが生まれる頃には、古い屋敷は見違えるようになっていた。二年後レアが、そしてその三年後にはロールが生まれた。

モンチャックの地主ピエール・デルマスは、近隣では並ぶ者のない幸せ者として通っていた。ラ・レオールからバザスに至るまで、またランゴンからキャディヤックに至るまで、妻と三人の可愛い娘に囲まれ穏やかに暮らす彼の幸福を、羨む者は多かった。

モンチャックのシャトーを取り囲んで、肥沃な土地や森、ブドウ園が数ヘクタールの規模で広がっている。ブドウ園は高級ワインであるソーテルヌ系の、きわめて良質の白ワインを産出した。この白ワインは、数度にわたって金メダルを獲得したほどの逸品である。芳醇な香りの赤ワインに

も恵まれた。十九世紀初めに建てられたこのだっぴろい屋敷を、シャトーと呼ぶのはいかにももったいぶった感じで、それというのも建物は醸造室に囲まれ、納屋や馬小屋、農具置き場を備えた農場が隣接していたからである。ピエール・デルマスの祖父は、バラ色から暗褐色までの色調を持つ、この地方独特のきれいな丸みを帯びた瓦を、こちらの方が洒落していると判断して冷やかなスレートで葺き替えさせてしまっていた。だが幸いなことに、酒蔵や納屋など母屋でない建物は、もとの屋根組みのままであった。灰色のスレート葺きのせいで屋敷はいかめしく、少し陰鬱な印象を与えたが、それはボルドー出身の祖先ならではのブルジョワ精神にはびつたりだったのである。

所有地はヴェルドレとサン・マケールの間、ガロンヌ川とランゴネ川を見下ろす丘の上という絶好の場所に位置していた。プラタナスがどこまでも並ぶ道を歩いて、近くの高げた鳩小屋をやり過ごし、さらに進んで農場の建物が近づいてきたと思ったら、一番手前の納屋を後にすると、通り道に出る（農場とシャトーの母屋以外の建物との間のスペースは、以前から「通り道」と呼ばれていて、そこに位置する巨大な台所が、實際上、屋敷の表玄関となっていた）。玄関ホールには様々なスタイルの家具がしつらえられ、大ぶりの白黒タイルの上に派手な色の絨毯を敷いてあるが、そこから入ってくるのは、初めて訪れる者だけであ

る。白壁には古い皿や愛らしい水彩画の数々、帝政期の見事な鏡がかけられ、陽気な調子を醸し出している。この気持ちのよいホールを抜けると、菩提樹の巨木が二本植わった中庭があり、気候が良くなると同時に、その木陰に家族総出で陣取って、日がな一日くつろぐのである。これほどゆったりできる場所はまずないだろう。リラの茂みとイボタノキの垣根に一部が囲まれ、木の植わっていないところには石柱が二本立っていて、そこから始まる芝生を下りていくと地方全体を見渡せる見晴らし台へ出る。右手には林と、花咲く庭と、ベルヴュまで広がるブドウ園が見下ろせる。

ピエール・デルマスはこの土地に対して愛情を抱くようになっていた。今では娘たち同然に可愛く思えた。粗野だが感受性の強い男なのである。久しい以前に亡くなったピエールの父親が、モンチャックの管理を息子に託したのは、あまり親しく行き来していなかった自分の兄弟姉妹たちが、ボルドーから遠すぎるという理由でこの土地を嫌っていたからだった。ピエールはここに腰を落ちつけるにあたって、必ず成功してやろうと決意した。兄弟から遺産の分け前を買い取るために、サン・テミリヨンの近くに住む裕福な地主の友人レーモン・ダルジラから金を借りた。こうしてピエールは、貨物船の舵を握る船長にこそなれなかったものの、モンチャックの唯一の主となったのだった。

八月が終わろうとしていた。ピエール・デルマスの次女で、十七歳になったばかりのレアは、まぶたを半ば閉じて、モンチャックの見晴らし台に低く巡らされた、季節柄まだ温かい石垣の上に腰かけていた。松林越しに潮の香りが時おり漂ってくる平原の方に顔を向け、縞模様サンダルを突っかけた剃き出しの小麦色の足をぶらぶらさせている。左右の手を石垣に置いて、白い薄衣の下で肉体が息づくのを感じ、その官能的な喜びに身を任せているのだ。満ち足りた気分のため息をつく、飼ひ猫モナが夜明けに目を覚ました時のように、体をゆっくりくねらせながら伸びをした。

レアは父親と同じようにこの土地を愛し、隅々まで知り尽くしていた。幼い頃はブドウの若枝を集めた薪束や、並んだ樽の後ろで、いとこや近所の友達と、かくれんぼをしたり、追いかっこをして遊んだ。いつでも一緒に遊ぶのは、醸造所長の息子で三歳年上のマチヤス・ファイヤール

だった。この少年はレアに身も心も捧げており、彼女がちらりとでも笑顔を見せてくれるのなら、何でも言うことをきく。レアの巻き毛はどんな時でもくしゃくしゃだったし、膝はすり傷だらけだったが、顔のほとんどを占めているかのようなぱっちりとした紫色の瞳が、黒く長い睫毛の下に隠れていた。レアのお気に入りの遊びは、マチヤスを試験にけることだ。十四歳になった日、少女は尋ねた。

「セックスのやり方教えてよ」

マチヤスは有頂天になって彼女を抱きしめると、納屋のまぐさの中で、差し出された美しい顔にキスを浴びせかけた。彼女は大きな紫色の目を薄目に開けて、少年のしぐさのいちいちをじっくり観察していた。少年が薄い白ブラウスのボタンをはずしてしまつと、レアはやりやすいように身を起こした。それからようやく恥ずかしくなつて、ふくらみかけた乳房を隠したが、同時に未知の疼きを体の中に感じた。